説教20200802フィリピ2：19-30 267　404　390

「パウロの計画」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　私たちは新型コロナウィルスが蔓延するこの世の中で悩み苦しんでいます。主よどうか私たちにあなたの平和をお与えくださいと祈らないではいられません。今、テレビやラジオを付けますと、新型コロナウィルス関連のニュースは絶えず報道されています。とりわけ、ウィズ コロナという言葉は広く使われて、一種のスローガンともなっているようです。例えば、「ウィズ コロナを実現するために私たちはソーシャル ディスタンスを守って生活していきましょう」ですとか「Withコロナの学校のあり方に知恵を絞り続けることが必要です」などど言って、新型コロナウィルスと共存できる新しい社会のあり方を模索していこうというものです。ところが、このWithコロナのスローガンは耳障りはよく、大きな可能性を感じさせる言葉ではありますが、いざ、身近にコロナ患者さんが出たとなりますと、その時、「私たちはどうすればよいのですか」、という問題に答えてくれそうにない、あくまで理念的であり具体性に欠けるスローガンといわざるを得ないように思います。かつ、自分自身がコロナ患者になった時、自分はこの社会から距離を置かれるのではないかという恐れを抱かせるスローガンでもあります。

では「Withコロナ患者」という言葉をご存じでしょうか。この言葉は、実はわたしが2-3日前に作った言葉なので、ほとんど知られていないでしょう。手前みそでいうのではないのですが、この「Withコロナ患者」という言葉は、私たちに、コロナ患者さんと共に歩んでいく道を具体的に示してくれるでしょう。身近にコロナ患者が出た時、私たちは決して彼を排除していくのではなく、知恵を尽くして心を尽くして、彼と共に歩んでいく方途を模索していきましょう。そして、彼が回復することを祈りましょう。又、自分自身が新型コロナウィルスに犯されないとも限りませんから、その時は「Withコロナ患者」の心を信じて周りの人に必要な助けを求めてまいりましょう。考えてみれば、「Withコロナ患者」という言葉はイエス様が重い皮膚病の人達と共に歩まれ、手を置かれてその病気を癒された、イエス様の福音の顕れであるかも知れません。

「Withコロナ患者」と「Withコロナ」、両者はとてもよく似た言葉ですが、それを聞く私たちに働く力は、全く違います。一方は私たちを憐れみへと導き、他方は、私たちを脅威へと導きます。つまりイエス様の福音は、私たちの言葉づかいの細部に現れてきます。イエス様が「人は、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と言われたのは、そのような細かなところに宿る神からの言葉を一つ一つを聞き分けていくという意味もあるのです。私たちは、主なる神のささやく声を、耳を澄まして聞き分けていく必要があるのです。

　私がなぜこのような言葉の問題をお話しましたかと申しますと、本日の説教題を「パウロの計画」としましたことに後悔をしているからです。これは「パウロの計画」ではなく「神の計画」でした。ですから説教題としましては「パウロに現れた神の計画」とでもすべきであったと思います。「パウロの計画」と「神の計画」も、冒頭のお話のごとくに、似て非なるものです。パウロにとって、生きるとはキリストであり、パウロはキリスト・イエスのしもべなのです。ですから、パウロ自身が主体となって計画をしたと思われるような表題には語弊があるでしょう。自戒を込めて言うのですが、そこには人の計画を神の計画と、安易に取り違えてしまう、私たちの罪の危うさがあるかもしれません。

さて、計画ということは私たちにとって重大なことです。私たちが神様の平和の計画に入れられるか、或いは人間の災いの計画に入れられるのか、これは大変重い問題です。パウロは、エフェソの信徒への手紙の中でも述べている通り、キリスト・イエスの秘められた計画を信じて、その計画のうちに歩まされました。その秘められた計画が実現された姿は、ヨハネの黙示録に示されておりますので、私たちは一度聖書を見渡して、その計画の概要に思いを致した方がよいと思います。

　では、キリスト・イエスの計画を歩まされたパウロは、自分の一つ一つの行い、についてどのような見方をしていたのでしょうか。いうまでもなくパウロの地上生涯は、ローマ帝国をまたにかけて伝道に明け暮れた、じつに行動的な生涯に見受けられますが、パウロ自身はその自らの行いをどのように捉えていたのでしょうか。

その答えは、言うまでもなく、パウロは自分を無にして、キリスト・イエスの僕となってこれらのことを行ったのです、が、それを支える彼の信仰について、テモテへの手紙でパウロは分かりやすく説明していますので、そこを見てみたいと思います。新約聖書３９１ページになりますが、テモテへの手紙２、１章９節をお読みします。「神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにおいてわたしたちのために与えられ、」とあります。つまりパウロは、私たちが救われるのは、私たちの行いによるのではなく、神の計画と恵みによる、と言っています。このことは、信仰義認と言って或いは皆さん、何回もお聞きになっているかもしれません。「信仰のみ、恵みのみ」「聖書のみ」というものですが、これもスローガンのように聞いてしまうと誤解される危険がありますので、ご説明をしたいと思います。

「信仰のみ、恵みのみ」という原則は、ルターが自身の長い信仰上の葛藤の日々を過ごしたのちに辿りついた、結論です。その葛藤の日々において彼は自らの行いを顧みて、その罪多き姿、罪を免れない存在に絶望し、キリストにすがり、救いを求めました。そして、先ほど引用しました「私たちが救われるのは、私たちの行いによるのではなく、神の計画と恵みによる」といった聖句に行きついたのです。それでルターは「信仰のみ、恵みのみ」「聖書のみ」であると気づき、そのように云ったのでした。私たちはもし仮に、ルターが経て来たその長い葛藤の日々、それは一つの行いでもありますが、それをすっ飛ばして、「私たちが救われるのは、私たちの行いによるのではなく、神の計画と恵みによる」と読んでしまいますと、得てして、では**私たちの行い**は何をしようと救いには関係なくて、大した問題ではないのだな、と思いがちです。しかしその考えは大きな危険をはらんでいます。そのことに思いを致すには、私たちは、毎週唱えています、「罪の告白と赦しの言葉」のお祈りを心を込めて行うことです。「私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず、思いと言葉と行いによって多くの罪を犯しています。どうか罪深い私たちをお赦し下さい」というお祈りには、私たちがなすべきこと、なさざるべきことに対する自己反省を厳しく迫るものがあります。この自己反省はルターが日々行ってきた道でもありましょうし、私たちが、将来に向けて絶えず、継続していくべき大切な祈りなのです。つまり、私たちは信仰が深まれば深まる程に、自らの行いに対する自己反省も深められ、かえって、自分の罪多き行いの姿に気づかされて、キリストに赦しと憐れみを求めたくなることでしょう。

　このような葛藤の日々を経てはじめて私たちは、神の救いが、私たちの行いの法則によるのではなく、神の恵みの法則によるのだと悟らされます。「行いの法則」「恵みの法則」というのもパウロの述べた言葉ですが、それはロマ書に記されています。（「恵みの法則」は「霊の法則」のことですが、恵みとして与えられた聖霊という意味です。）

パウロ、そして私たちは回心して洗礼を受けることによって、「行いの法則」を生きる者から、「恵みの法則」で生かされる者へと変えられました。或いは今も尚、変えられつつあります。「罪の告白と赦しの言葉」のお祈りをしながら、変えられていっているのです。

「行いの法則」と、「恵みの法則」の違いを平たく言えば、行いの法則では、報酬によって、報酬を期待して、行動しますが、恵みの法則では、私たちは、恵みとして受け渡します。すなわちタダで受け、タダでお渡しするということです。

「行いの法則」によるか「恵みの法則」よるかは、ただ、行いのみの問題ではありません。それは私たちの思いと言葉、そして行いを、全人格的に規定するものです。ですから、私たちが「恵みの法則」の方へ移されていくということは、将に、救いに関わる重大事だといわざるを得ないのです。

恵みの法則の方に入れられた、わたしたちの、思い、言葉、そして行いの一つ一つには、自ずと恵みの果実が現れることでしょう。今日の聖書箇所を見ていきますと、ここに記されている、パウロからの手紙の言葉一つ一つも、私たちを建て上げてくれる、恵みの言葉であると思わされます。これを読む私たちも全き恵みの法則に従って読んで参りたいと願います。

先ず最初に出て来ます、テモテは、冒頭から、パウロが我が子のように思っていた同労者として紹介され、又、今日もテモテへの手紙で触れられましたが、その人となりは、敵をつくらない柔らかい物腰の人物であったことが推察されます。パウロが、テモテをフィリピの教会に遣わそうとして、したためているこの文面からも、テモテがフィリピの教会に快く迎え入れられることに、一点の不安も抱いてはいない様子が読み取れます。つまりテモテは良い人として、みんなから認められていたのでしょう。

　それに対し、次に出て来ますエパフロディトの方はどうでしょうか。単純に比較して、パウロはこのエパフロディトの紹介に、より多くの字数を費やしていますし、文面も、テモテの紹介と比較して、重いものが感じられます。２６節「しきりにあなたがた一同と会いたがっており」ですとか、２９節「だから、主に結ばれている者として大いに歓迎してください」ですとか、パウロは必死に、エパフロディトとフィリピの人達の間を取り持とうとしているようです。私は、エパフロディトという人が、テモテの様には万人受けするような人柄でなかったように思います。ある註解書は「エパフロディトの価値が、フィリピで正しく評価されていたかどうかは疑問である」との見解を示しています。続いてその註解書は「今日のわれわれの教会においても、最良のキリスト者が必ずしも高く評価されているとはかぎらない。われわれ人間の評価は、金銭や名声といったものに影響されやすいから」であると続けています。

私たちは、ここで又「行いの法則」によるのか「恵みの法則」よるのかに思いを致すことでしょう。事実上、今の教会においても「行いの法則」と「恵みの法則」とは混在しています。そしてその両者は、似て非なるものなので、見分けることも私たち人間には出来ないことかも知れません。ですからここに至って私たちは又、「罪の告白と赦しの言葉」のお祈りをしないではいられないのです。

「エパフロディトのような人びとを歓迎し、敬いなさい。」このパウロの勧告は、恵みに満ちた御言葉です。なぜなら、私たちは、そのような**自分に反する**と思われるような人々を歓迎し、受け入れることを繰り返しつつ、やがてキリストの業に命を架け、キリストの十字架の死を、恵みとして受け入れることが出来る者へと変えられていくからです。

お祈りいたします

天の父なる神様、今日の主日に私たち兄弟姉妹を招いて下さり、あなたの御言葉を聞けます幸いに感謝いたします。私たちは、今の世の歩みにおいて、様々な言葉の洪水に流されそうになっています。どうかそんな私たちをあなたの御言葉によって、支えお守りください。どうか、あなたの御言葉によって、いつも私たちを祝福し、生きる勇気と元気をお与えください。私たちがあなたの憐れみのうちに生かされ、隣人たちに喜びを与えていくことが出来ますように。

今日は、平和主日の礼拝をお奉げしています。どうか世界の諸教会が、あなたの平和のうちに一つとされ、私たちが一つの同じ聖霊に満たされて、一つの同じ喜びのうちに生かされますように。

今、この地上におきましては、大雨などによる災害や、伝染病によって、多くの方々の命が失われ、また苦難と悲しみのうちに歩んでおられる方々がおられます。どうかその一人一人にあなたの憐れみと癒しとが受け入れられ、新たな希望のうちに歩み出すことが出来ますように。どうか悲しみを喜びへと変えて下さいますように。

あなたのご計画は、私たちにははかり知ることが出来ません。どうか私たちを、その平和の計画を信じ、共に喜びながらそのうちに歩まされる兄弟姉妹となさしめてください。

父と聖霊と共に生き支配しておられる私たちの救い主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。